

## 「臨床哲学」をめぐる

柳 沢 貴 司

東亜大学 総合人間・文化学部 人間学研究室

E-mail: yanagi@po.cc.toua-u.ac.jp

哲学と社会の接点はどこにあるのだろうか。おそらくそれに対する答えは、他の学問の場合ほどには自明ではない。哲学者が実際に社会の中で何かに貢献している姿を目にすることはほとんどないと言ってよいし、哲学が現実社会を改善する、ということもなかなか想像しにくいことである。

ここでは、大阪大学の鷺田清一が中心になって提唱している「臨床哲学」というプロジェクトを取り上げてみたい。そこでは哲学と社会の接点を新たな仕方で見出そうとする試みがなされているからである。

### 1. 臨床哲学の構想

「臨床哲学」と言われる限りは、まずは、「臨床」という言葉が問題になってくる。鷺田はこの「臨床」という言葉を人々の「苦しみの場所」と言い換えている<sup>(1)</sup>。人々の「苦しみの場所」に立ち、そこで哲学的思考を行なうことが、「臨床哲学」として考えられるのである。ただし臨床哲学は、臨床心理学、精神医学のように「治療の学」であるわけではない。それは「苦しみを解体する」のではない。

臨床哲学が試みるべき作業をとりあえず描き出してみるなら、問題としての「苦しみ」を解体するのではなく……問題をともに抱え込み、分節し、理解し、考えるといういとなみを通じてそれを内側から越えてゆくこと、あるいは越えてゆく力と呼び込むことと

も表現できるだろうか。<sup>(2)</sup>

このようなことが可能であると考えられるのは、人の言葉を「聴く」ということ、「聴きとる」ということそれ自体に「力」があると考えられているからである。

じぶんの言葉を受けとめてもらえる経験、じぶんのことばを聴きとってもらえる経験が、受苦者にとってはとても大きな力になるということ、その《聴くことの力》を少なくとも信じて、臨床哲学の核に据えることができるかとおもうのである。<sup>(3)</sup>

そしてこの「聴きとってもらえることが力になる」という洞察こそが、まさに『「聴く」ことの力』という本のライトモチーフなのである。この本では、「聴く」ということに焦点が当てられる。しかもそこでは、「聴く」とことについての哲学ではなく、哲学それ自体を「聴く」とこととして考えたいと言われる<sup>(4)</sup>。人々の苦しみの場所で人々の声を「聴く」こと、それが臨床哲学だ、と言うのである。

具体的には、その実践は「ケアする人のケア」として構想されている。その実際の活動は、「ケアする人」、例えば、ナースであり、教師でありの声を聴くことになる<sup>(5)</sup>。その声を聴き、理解し、分節し、それに「かたちを与える」<sup>(6)</sup>ことで、「ケアするひととその自己理解とを部分的にも「仲介」<sup>(7)</sup>しようとするのである。だからつまり、「聴く」こと、そして対

話することで、相手の自己理解を促進することこそが、「ケア」の本質であると考えられるのである。

哲学が「聴く」こととして考えられていることからわかるとおり、ここでの哲学は受動的なものである<sup>(8)</sup>。この理解はヴィクトール・フランクルへの批判において最も明確に示されているように思われる。鷺田は、フランクルのように、苦悩を意味の中で捉えることを否定する。苦悩に耐え抜くことは「意味あること」であるとして、それを目標、課題にすることを否定する。フランクル自身は、苦悩を何か消極的なものと見なしてそれを克服しようとしているわけではない。苦悩の「治療法」を探し出そうとしているわけではない。その限り、フランクルの見解はそれだけで十分「受動的」である。しかし鷺田はそれさえも拒否する。そのように苦悩の意味を語ったところで、それは本当に苦しんでいる人には必ずしも手助けとはなりえないからである。「苦悩の意味」は、必ずしも「生きる理由」を与えてはくれないからである。「生きる理由」を与えてくれるものは、「意味」ではなく、むしろ「経験」であり、「生きることが楽しいものであることの経験」、つまりは、「自らの生が無条件に肯定されることの経験」である、と言うのである<sup>(9)</sup>。

鷺田は「苦しむ」ことを意味ある目標とすることを否定する。だからここで哲学者は、もはや苦しみの意味を「語る」のではない。むしろ、他人の苦しみを「聴き」、理解し、そして共に「こうむる」のである。そしてその「共に苦しむ」ことのうちには「癒し」の力があるものと考えられるのである。臨床哲学は、「苦しみをともにすること」(sym-pathy)として活動を開始する<sup>(10)</sup>のである。

## 2. 臨床哲学の社会への関わり方

このような哲学観は、やはり従来の哲学観とは根本的に異なっているように思われる。これはいわゆる「社会哲学」のようにして社会との接点を見出そうとするものではない。「社会哲

学」は、社会で起こっている問題に対して何らかの提言をしていくものであり、何らかの対策を「語る」ものであると言えるからである。

しばしば批判されるごとく、「社会哲学」、あるいは「応用倫理学」は原理主義的な性格を有している。それらは普遍的な原則を個々の問題にあてはめて問題を解決しようとする。個々の問題は普遍的な問題の一事例として解釈されることによって、その個別性を失う。「ケア」という個別的人間との個別な関係を考えていく際には、こうした原理主義的な性格は致命的である。臨床哲学はこのような思考とは対極に位置する仕方、個別性に焦点を置き、個別な問題を聴きとり、考えようとする。そこでは、「個別な問題が一事例としてではなしに、個別なままにかたちをあたえられるのでなければならない」のである<sup>(11)</sup>。だからまた、臨床哲学は「たったひとりの他者に深くかかわることで終わることもありうるし、またそうであっていい<sup>(12)</sup>」ということになるのである。臨床哲学は社会を高めから見つめて、観察して提言を行なうものではない。それはむしろ哲学それ自体を社会の中に引き戻そうとしていると言える。人々の対話という相互作用の間に哲学を引き戻そうとしているのである。

しかしこのように考えられた場合、直ちに問題になってくるのは、臨床哲学の専門性はどこにあるのか、ということである。「聴く」ということは、ほとんど誰もがができることのように思われる。そこには何か特別に「哲学者」としての能力が要求されるのだろうか。さしあたり、臨床という場所での「哲学的思考」こそが、臨床哲学の専門性であると言えることができるだろう。しかし、その「哲学的思考」はいったいどういうものであるのか、となると、それもまた大きな問題である。

個別性に焦点を置く臨床哲学はどうしてもその方法論が脆弱にならざるをえない。その方法は「いいかげん」、「どっちつかず」ですらある。しかし鷺田は、この「いいかげん」、「どっちつかず」はまた利点になりうると主張する。とりわけそれが「ケア」に関わる限りにおいて

である。

「どっちつかず」や「いいかげんさ」というマイナス要因を裏返すこと。このことを意識するには、もう一つ理由がある。ケアというのは、個人がじぶんの行為を正当化しやすい領域だということ、その意味でいちばん入り方のむずかしい危うい領域だということである。だからみんなそっと入り込む。これが義務になったり（人間の自己肯定）、アリバイになったりしたら元も子もないのである。(13)

「どっちつかず」、「いいかげんさ」が失われて義務や倫理になってしまったら、ケアはもはやケアではありえないのである。その限りまた、「ケアする人のケア」たる臨床哲学にも「どっちつかず」、「いいかげんさ」が付きまとわざるをえない。「哲学的思考」と言う論理的、整合的な思考のことを指すかのような気がするが、臨床哲学はそれとは相容れない要素を含んでいるのである。

もちろんこれだけでは、臨床哲学の「哲学的思考」が実際どのようなものであるのかはわからない。そしてその専門性はどこにあるのか、という問いに答えたことにもならない。これらの問いは、臨床哲学が学問として成立するために、今後更に突き詰めていかねばならない重要な問題であると言えるだろう。

ただし、一つだけ次の点には注意を喚起しておきたいと思う。それは、臨床哲学が何を目指しているのか、ということに関係する。鷺田は「あとがき」の中で次のように述べている。

……臨床哲学は、ある意味でなによりも他のひとを知りたい、他のひとに触れたい、なにかを伝えあいたいという、静かではあるがやみがたい思いにつき動かされているはずである。(14)

臨床哲学は従来の哲学への批判という側面を持ってはいるが、その動因になっているのは、哲学についての特定の理念ではない。「哲学か

くあるべし」という理念ではない。そうではなく、「他のひとを知りたい、他のひとに触れたい」という人間の思いこそがその動因なのである。もっとも、この「他のひとを知り、他のひとに触れる」ということのために必要なのは、おそらく学問的な観察眼ではない。この人間の思いにこたえるには、学問は学問という枠組みから逸脱していかざるをえないのである。臨床哲学は、あまり「哲学」、「学問」とは呼べないもののようにも見える。しかし臨床哲学がそのような様相を呈するのは、まさにそれが他の人に触れようとしているからなのである。

#### 注記

- (1) 鷺田清一（1999）『「聴く」ことの力』TBSブリタニカ、53頁。以下、引用はすべてこの著作からである。引用箇所は頁数のみを記す。
- (2) 55頁
- (3) 55頁
- (4) 12頁
- (5) 近刊『〈弱さ〉のちから』では、そうした人々との対話が元になって話が展開されている。参照、鷺田清一（2001）『〈弱さ〉のちから—ホスピタブルな光景』講談社。
- (6) 30頁
- (7) 255頁
- (8) 『「聴く」ことの力』の中では、「他者の苦痛を感じないではいられないこと」（「ヴェルネラビリティ」）であるとか、「歓待する者が歓待される」ということ、そして「聴く」ということなどが取り上げられる。これらに焦点が当てられるとき、共通しているのはその「受動性」である。
- (9) 250-252頁
- (10) 57頁
- (11) 34頁
- (12) 254頁
- (13) 256頁
- (14) 268頁